



# 巻頭言

## 研究の動機

**永田恭介** Kyoussuke NAGATA  
筑波大学 学長



大学で研究し、教育に携わり、今では大学のマネジメントに関わるようになって、最近つくづく思うことは、本当に大学で思ったような研究が行われているのかどうかということです。

イノベーションという言葉が喧伝されています。本来、イノベーションという言葉は、新しいアイデアから新たな価値を創造し、社会変革に繋げていくことを意味しています。しかし、世の中では、イノベーション創出は新しい技術の創出というような意味で用いられることが多いようです。そのような背景と関連した政策もあり、大学においても出口指向が強い研究に注目や研究資源配分が向かっているように感じています。大学には、元来、地域社会の、やがて国家社会の、そして今やグローバル社会の変革を先導する中核としての役割が期待されています。この変革を実体的に支えるのは科学技術イノベーションであり、それを社会実装するための人文および社会科学的なイノベーションです。そうであれば、大学にはこれらのイノベーションを起こす原動力となることが期待されていることとなります。原動力は、新たな発見や発明の上に成り立っていると大学が自負する基礎、応用、開発に関わる様々な研究です。

少しショックな調査結果が公表されています。科学技術政策研究所（NISTEP）、一橋大学イノベーション研究センターおよびジョージア工科大学によって行われた連携調査研究「科学における知識生産プロセス：日米の科学者に対する大規模調査からの主要な発見事実」（2011年12月）です。図を見ていただければ、一目瞭然です。ポーア型が日米で差がなく最も高く、パストゥール型では米国は日本の2倍以上の値が示されています。エジソン型については、やや日本が多い。問題は、この3つの型以外で日本が米国の3倍近い値を示したことです。日本では一体何を研究の動機として重視しているのでしょうか？

さらに同じ調査結果が述べている興味深い点は、研究成果が当初の予想どおりであり、研究プロセスも計画どおりであったのは、日本で11%、米国で14%であったということです。つまり大半は、思いどおりにはいかなかったということです。さらに、思いどおりにはいかなかったほど、よりセレンディピティに繋がったとされていることです。研究は思いどおりに進むことはなく、そうではないがゆえに開始当初には考えていなかった発見をもたらすということになります。熟練の研究者たちが口にする、「研究は上手いかないときは重要であり、上手いいったときは予想できるという点で感動は少ない」に一致するわけです。

大学での研究について、動機とセレンディピティについて考え直してみませんか。

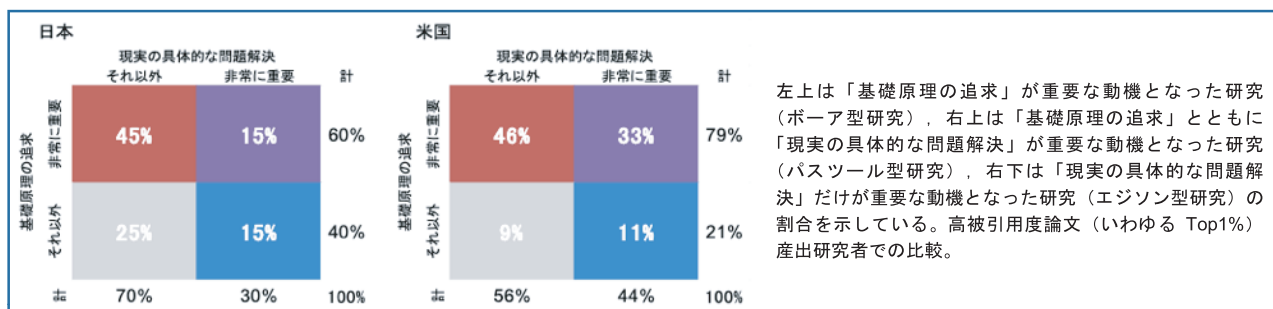


図 研究プロジェクトの分類に関する日米比較